OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日タイ認識的モダリティ形式の対照研究：「だろう」「かもしれない」「はずだ」を中心に
Author(s)	Rattanapongpinyo, Pratyaporn
Citation	大阪大学, 2019, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/73543
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名	（ラッタナポンピンヨ　プラッチャヤポーン）
論文題名	日タイ認識的モダリティ形式の対照研究：「だろう」「かもしれない」「はずだ」を中心に

論文内容の要旨

「だろう」「かもしれない」「はずだ」について学習する際、タイ人学習者は「だろう」は「khoŋ(cà)」、「かもしれない」は「ʔàat(cà)」、「はずだ」は「nâacà」というように、一対一の意味の対応関係で学習する（友松他2002、Banjongmanee 2004、スリーエーネットワーク2006）。さらに、従来の日タイ語の認識的モダリティ形式に関する対照研究の先行研究（ピヤマーワディー1992、田中1996）においても同様に「だろう」「かもしれない」「はずだ」は「khoŋ(cà)」「ʔàat(cà)」「nâacà」というタイ語の認識的モダリティ形式と一対一の対応関係をなしているとしている。

しかし、実例にあたると、教科書と従来の先行研究で示される対応関係で翻訳できない場合もあり、多様な対応関係が見られる。

両言語間における多様な対応関係を生み出したのには、大きく2つの要因があると考えられる。まず、日タイ語の「認識的モダリティ形式」用法の仕組みの違いである。そして、もう一つは、日本語とタイ語における上記の形式が認識的用法から派生した用法を持っているためだと考えられる。

しかし、前述したように、今までの日タイ対照研究の先行研究の考察は、認識的用法（推量用法）を中心に、各形式がどの形式と対応しているかという観察にとどまっており、実際はどのように訳されているかという点、及び派生的な用法の場合はどの認識的モダリティが選択されるかという点、に関してはあまり考察されていない。

そのため、本研究は以下を目的とする。

① 実際に日本語の「だろう」「かもしれない」「はずだ」とタイ語の「khoŋ(cà)」「ʔàat(cà)」「nâacà」が両言語でどのように訳されているか、両言語の認識的モダリティ形式がどのような対応関係を成しているかについて明らかにし、従来説明されていない対応関係があれば、それに関して説明することを目的とする。

② 両言語を比較対照することにより、日本語の「だろう」 「かもしれない」「はずだ」とタイ語の「khoŋ(cà)」「ʔàat(cà)」「nâacà」の用法を分析しながら、日本語とタイ語の認識的モダリティ形式の特徴を明らかにする。

第1章では、本研究の背景、目的と全体の流れを紹介する。

第2章では、認識的モダリティ形式に関するタイで使われている日本語の教科書と日タイ語の認識的モダリティ形式対照に関する先行研究をまとめながら、残されている問題点を示す。

第3章では、調査概要について説明する。目的①を明らかにするために、タイ語訳がある日本の作品と日本語訳があるタイの作品から、日本語の「だろう」「かもしれない」「はずだ」とタイ語の「khoŋ(cà)」「ʔàat(cà)」「nâacà」の例を抜き出し、両言語の対応関係によって分類する。

まず、目的①における実際に両言語でどのように訳されているかという点に関して、本研究の調査では、両言語は教科書のようにある形式が特定の形式に訳されるわけではないことを確認できる。日本語の「だろう」「かもしれない」「はずだ」は、タイ語の「無形モダリティ形式」「khoŋ(cà)」「ʔàat(cà)」

「nâacà」に多く訳されていることが明らかになった。一方、タイ語の「khoŋ(cà)」「ʔàat(cà)」「nâacà」は、日本語の「無形モダリティ形式」「だろう」「かもしれない」「はずだ」に多く訳されていることが明らかになった。

次に、目的①における両言語の認識的モダリティ形式がどのような対応関係を成しているかという点に関して、本研究の調査では、従来タイで使われている日本語の教科書では、3つの対応関係のみ説明されているが、説明されていない対応関係もあることが確認できた。目的①における従来説明されていない対応関係に関して説明するため、第3章の結果を基に、第4章～第8章でそれぞれの対応関係について分析を行った。まず、出現文と使用状況について分析し、それから、先行研究を踏まえてその形式の特徴を分析する。最後に、それぞれの形式が推量・可能性・推論を表すかどうか確認するため、概言を表す副詞と共起できるかどうか、また、この他にもどのような副詞と共起するかという観点から検討する。

第4章では、タイ語の無形モダリティ形式に対応する「だろう」「かもしれない」「はずだ」について分析した。タイ語の「ʔàat(cà)」「khoŋ(cà)」「nâacà」は、ある命題の事実を知らない場合にのみ使用できるが、一方、日本語の「かもしれない」「だろう」「はずだ」は、話し手がある命題についての事実を知っている場合に使用することができる。これは基本的な用法から離れた派生的な用法として使用される。

第5章では、日本語の無形モダリティ形式に対応する「khoŋ(cà)」「ʔàat(cà)」「nâacà」、について分析した。話し手がある命題についての事実を知らない場合に関して、日本語は無形モダリティ形式で判断の意味を表すことができるが、タイ語では認識的モダリティ形式がなければ、判断の意味がなくなり、事実を述べる文になることが分かった。

第6章では、日本語の「かもしれない」に対応するタイ語の認識的モダリティ形式について分析した。日本語の「かもしれない」とタイ語の「ʔàat(cà)」は、基本的に話し手が事実を知らないことについて可能性を表す用法として同様に使用されている。可能性を表す場合、日本語の「かもしれない」は、過去・現在・未来、及び反事実条件でも使用されているが、タイ語の「ʔàat(cà)」は反事実条件文で使用できないため、両言語は従来の先行研究や教科書のような対応関係を成していない場合があることが明らかとなった。また、可能性を表す用法から離れた対人的な婉曲用法としても、日本語の「かもしれない」とタイ語の「ʔàat(cà)」が同様に使用されているが、強い義務を表す場合、タイ語では「khoŋ(cà)tôŋ」という形式が使用されているため「ʔàat(cà)」は使用されていないことが分かった。

第7章では、日本語の「だろう」に対応するタイ語の認識的モダリティ形式について分析した。日本語の「だろう」とタイ語の「khoŋ(cà)」は、基本的に想像の中のものであり、話し手が知りえないことについて推量を表す形式である。推量するためには、根拠や前提が必要だが、その根拠と前提にははっきり分からないことや不確かさがある。そのため、概言を表す副詞と共起することができる。しかし、対話文で「対案・反論」を表す状況において、日本語の「だろう」は、推量用法から離れ、話し手の意見を控えめにする用法を持っているが、タイ語の「khoŋ(cà)」は推量を表す用法しか持っていないため、両言語は従来の先行研究や教科書のような対応関係を成していない場合があることが明らかとなった。

第8章では、日本語の「はずだ」に対応するタイ語の認識的モダリティ形式について分析した。その結果、日本語の「はずだ」とタイ語の「nâacà」は基本的に話し手が確かな根拠に基づいて推論し、結論を表す用法として同様に使用されている。その推論に関して話し手が確信を持っているため、概言を表す副詞と共起することができる。しかし、反事実について推論する場合、日本語では「はずだ」が使用できるが、タイ語の「nâacà」は事実を知らない場合にのみ使用されるため、反事実の推論には使用できず、両言語は従来の先行研究や教科書のような対応関係を成していない場合があることが

明らかとなった。

第9章では、目的②を明らかにするために、第4章～第8章の結果を基にし、両言語を比較対照することにより、日本語の「無形モダリティ形式」「だろう」 「かもしれない」「はずだ」とタイ語の「無形モダリティ形式」「khoŋ(cà)」「ʔàat(cà)」「nâacà」の用法と特徴をまとめる。両言語の特徴に関して明らかになったのは、次の4点である。

1) 無形モダリティ形式に関して、断定できない場合、日本語は無形モダリティ形式で判断の意味を表すことができるが、タイ語ではモダリティ形式を入れなければ、判断の意味が表せず、事実を述べる文になる。このように、無形モダリティ形式で断定の意味を表すのは日本語の特徴である。
2) 日本語の「かもしれない」「だろう」「はずだ」は、未来のこと、過去のこと及び反事実条件について使用できるが、タイ語では反事実条件を表す場合、「khoŋ(cà)」のみが使用されている。このように、反事実の制限があるのはタイ語の特徴だと言える。
3) 話し手の複数の不確かなことを 1 文中で同じ認識的モダリティ形式を使用して列挙する場合に関して、日本語では「だろう」と「かもしれない」はそれぞれ繰り返し使用できるが、タイ語では「ʔàat(cà)」しか使用できない。このように、複数の不確かなことを列挙する際に使用できる認識的モダリティ形式に制限があるのは、タイ語の特徴である。
4) 日本語の「かもしれない」「だろう」「はずだ」は、基本的な用法から離れた対人的用法を持っている。一方、タイ語では「ʔàat(cà)」以外、派生的な対人的用法を持っていない。このように、認識の用法から対人的な用法として使用されるのは、日本語の認識的モダリティ形式の特徴である。

以上の4つの日本語とタイ語認識的モダリティ形式の特徴が、両言語が一対一に対応できず、多様な対応関係を生み出している要因だということが明らかになった。

本稿では、タイ語に翻訳された日本語の作品と日本語に訳されたタイ語の作品から用例を抜き出し、考察を行った。作品のジャンルの原因で、日本語の無形モダリティ形式に対応する「nâacà」など、用例の少ない対応関係がある。今後は、用例を増やし、考察を行いたいと思う。また、日本語の認識的モダリティ形式の派生した用法に関しては、実際にタイ人日本語学習者はどのように使用するのか、母語の原因で誤用があるのかという点について調査を行いたい。

様式7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名	（ PRATYAPORN RATTANAPONGPINYO ）	
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主 査　教授	中田一志
	副 査　教授	三原育子
	副 査　教授	宮本マラシー
	副 査　教授	村岡貴子
	副 査　准教授	山川　太

論文審査の結果の要旨

Pratyaporn Rattanapongpinyo氏の博士論文は，認識的モダリティ形式に関して日タイ語のあらゆる可能な組合せに関する言語現象を網羅的に観察したという点において資料的な価値があることはもちろんのこと，日本人研究者による日本語研究においてこれまで明確に認識されてこなかった日本語の言語現象を指摘し，また、タイ語研究においてはこれまで先行研究で触れることのなかった言語現象を分析し，モダリティの研究に関して新たな知見が得られる研究としての価値を有している。

第１章では，タイ人学習者のための初級日本語教科書において「だろう」「かもしれない」「はずだ」は，それぞれkhoŋ(cà)，ʔàat(cà)，nâacàに意味的に一対一対応するように記述されているが，実際は複雑な対応関係を持っていることを指摘し，研究の目的として，1)両言語の認識的モダリティ形式がどのような対応関係をなしているかを明らかにし，2)あらゆる可能な対応関係における両言語の形式の用法を分析し，日タイ語の認識的モダリティ形式の特徴を明らかにすることを掲げている。

第２章では，認識的モダリティ形式に関わる，日タイ語の認識的モダリティに関する先行研究をまとめ，残されている問題点を明らかにし，上述のそれぞれの言語の形式だけでなく，無形の認識的モダリティ形式をも含めて，先行研究の有無が分かるような対照表を作成している。

第３章では，日本語とタイ語の小説とドラマから上述の形式の用例を採集するという調査についての概要が述べられている。上述の両言語の言語形式および無形のモダリティ形式についての日本語四形式，タイ語四形式の対照表に，採集した実例の数値を書き込むことによって，教科書に記述されている日タイの対応関係がいかに部分的であり，その以外の対応関係も十分に多く，分析する価値のあることが明示的に示されている。また，日本語あるいはタイ語の認識的モダリティ形式に対応するタイ語あるいは日本語の無形の形式についても研究対象とするべき根拠となる数値が示されている。

第４章から第８章にかけては，順に上述の対照表に示された具体的な実例の分析がなされる。第４章では，日本語の「かもしれない」「だろう」「はずだ」がタイ語では無形で表わされる言語現象について，第５章では，タイ語のʔàat(cà)，khoŋ(cà)，nâacàが日本語では無形で表わされる言語現象について，第６章では，日本語の「かもしれない」がタイ語のʔàat(cà)，khoŋ(cà)，無形のモダリティ形式で表される言語現象について，第７章では，日本語の「だろう」がタイ語のʔàat(cà)，khoŋ(cà)，nâacà，無形のモダリティ形式で表される言語現象について，第８章では，日本語の「はずだ」がタイ語のkhoŋ(cà)，nâacà，無形のモダリティ形式で表される言語現象について，詳細な記述がなされている。

これらの記述で特筆するべき点は，以下の通りである。

第４章および第５章では，日本語では，話し手がある命題について事実を知らない場合でも，それを確かなものとして捉える場合には，有形の認識的モダリティ形式がない無形でもかまわないが，タイ語では，ある命題についての事実を知らない場合は，無形では不可能であることを実証的に示している。この点に関しては一部修士論文で記述したところであるが，さらに実証的な記述となっている。第６章から第８章の分析では，「かもしれない」とʔàat(cà)の用法が認識的用法として重なる用法と異なる用法が明示的に提示されている。この分析によってʔàat(cà)の「前置き用法」と「断定保留用

法」については先行研究で指摘されていない新しい知見として提示されている。「だろう」とkhoŋ(cà)の用法および「はずだ」とnâacàの用法についても同様に重なる用法と異なる用法が明示的に示されている。この分析によって，日本語の待遇を表す断定保留用法がさらに明らかとなり，タイ語の「予定を表す用法」が新しい知見として提示されている。

最終章の第９章では日タイ語の認識モダリティ形式の用法と特徴が簡潔に四つにまとめられている。これは両言語の学習者にとって留意すべき項目であり，同時に教育に携わる者にとっても有効な記述であると評価することができる。

また，本博士論文中には収集した両言語の資料の一部のみしか収録されていないが，認識的モダリティに関わるすでに分析済みの日本語の用例364例，タイ語の用例278例が整理され，公開されれば今後の日タイ語翻訳における重要かつ貴重な資料となる可能性を有している。

以上のことから，本審査委員会は全員一致で，Pratyaporn Rattanapongpinyo氏の博士論文が博士（日本語・日本文化）の学位を授与されるにふさわしい内容を備えていると判断し，合格という結論に至った。